砂山稔著『赤壁と碧城』―唐宋の文人と道教―

坂内榮夫

本書は全體が二部構成、全二十一章（序章を含む）からなる論文集である。著者の前著『隋唐道教思想史研究』（一九九〇年　平河出版社）以降に發表された、主要な論考を集めたものである。第一部「唐代の文人と道教」は、王維・李白・杜甫・韓愈・柳宗元と道教との關わりを考察した論考、及び重玄派の『九幽經』等の道教經典、茅山派と交渉をもった沈佺期・宋之問についての論考からなる。第二部「宋代の文人と道教」は、唐宋八大家の内の宋代六人と道教の關係、及び蘇軾の子蘇過、孫の蘇符、蘇轍の孫蘇籀等、蘇氏一族と道教の關係を考察した論考群である。このように大部な論集であるので、論集全てに亘って論評を加えることは、紙幅の限りもあり且つ評者の能力を超える事である。よって、その内の幾つか評者の關心を引いた論考について述べることで書評の責めを塞ぐ事にしたい。

第一部「唐代の文人と道教」序章の二節で、著者は小林正美氏著『唐代の道教と天師道』について反批判を加えている。その中では、重玄派道士黎元興と茅山派道士李含光がともに三洞法師と呼ばれて學派・宗派の相違を示していない事を根據に、氏の「道教＝天師道」説に反論している。これに關して私見を述べると、唐代道士が

全て天師道の位階に基づいているからと言って、直ちにそれが唐代道士全員が天師道の道士であったと言う結論にはならないであろう。なぜなら、それはただ國家管理のあり方として、全ての道士を天師道の道士として處理すると言う事を意味するに過ぎないもので、宗派とは別次元の問題であるとも解釋できるからである。位階が國家の給田規定と關連するのであればなおさらであろう。もしも全ての道士が天師道の道士であったのなら、唐代の張天師は絶大な權威を持っていたはずで、そうであれば今日に遺される唐代天師道關係の資料の少なさは、説明するのが難しいであろう。

第七章「李白と唐代の道教―レトロとモダンの間―」では、李白と茅山派道士李含光と親しかった胡紫陽や元丹丘との關わりについて考察する。そこで、李白は當時先端的であり緻密で理論的な重玄派道教を好まず、不死を目指す神祕的で實踐的な茅山派道教に接近したと指摘する。卽ち、「モダン」な重玄派ではなく「レトロ」な茅山派が好みであったのである。そして、「これは李白の「古風」に見える道教思想が、唐代人の道教思想の骨格部分を的確に代表しているのではないか」と指摘する。この「モダン」と「レトロ」という視點は、中國思想研究における道教研究に關して重要な意味を持つのではないかと考える。從來、道教研究は道藏中に收める資料を分析する事により、道教教理や宗教儀禮を解明することが主に行われている。最先端の教理の研究が行われているのである。しかし、道教には色々の位相が考えられる。專門の道士達が研究している最先端の教理、民衆が信じる土俗信仰と混交したような道教、そして一般の知識人が理解したであろう道教思想、等など。一般の士大夫が道教の最先端理論を理解したとは考えがたいので、恐らくは道士が分かりやすく説明した道教理論を理解していたのであろう。「モダン」と「レトロ」の視點を導入することにより、道士と知識人の道教教理に對する理解の乖離が研究者に明確に意識されるようになろう。それにより、一般知識人に道教がどのように意識されていたか

も明らかになり、道教が中國の學術・思想に占める位置を一層明確にする事が可能になる。中國思想研究における道教思想研究―道教は、目錄學的に言えば、あくまで子部道家類という位置づけであるという事實―を行う上での重要な指摘と言えよう。

第十章「韓愈の死生觀と道教―老莊・金丹・神仙・女性觀―」では、廢佛論者として有名な韓愈がどのように道教と關わったかについて、老莊・金丹・神仙などの角度から考察する。先ず、思想家としての韓愈は『老子』を批判するが、文學者としては『莊子』には好意的である。次に、韓愈は金丹について關心があったことは明瞭であるが、自ら服用して長生不死を求める程ではなかった。そして、この長生不死に關連して、韓愈の思想の特徴は「死」への關心の深さにあると指摘する。神仙の存在については曖昧な態度をとるが、瞿童や謝自然の白日昇天については批判しているとする。韓愈の思想の特徴は「死」への關心の深さにあるとの指摘は、著者獨自の視點であり斬新である。願わくば、この視點から韓愈の思想をもう少し詳しく分析した、研究成果を是非とも公表して頂きたい。

二部第一章「歐陽脩の青詞について―歐陽脩と道教思想―」では、歐陽脩の『內制集』に收錄される「青詞」「密詞」を中心に、歐陽脩と道教思想との關わりを考察して、仁宗から神宗期の道教思想の解明を目指している。歐陽脩が書いた青詞の目的は、自然の運行・現象、人事、道教教義の三つに分けられ、獻上された場所は中央と地方の二箇所に大別できる。その青詞は、宋代になって尊崇されるようになった玉皇大帝に捧げられている。そして青詞中には『黃庭經』に現われる神格、紫淸大道君が見える事に注目する。これは、歐陽脩がこれら神格を認めていたこと意味するからであると言う。また、歐陽脩は人閒が神仙になる事については懷疑的であり、神格化された老子にも懷疑的であったが、思想書としての『老子』は高く評價していた。そして、道の解釋は『老子』

に據ったであろうと指摘する。從來利用されることのなかった「青詞」「密詞」に基づいて、新たな角度から歐陽脩の道教思想を研究したものとして高く評價できる論文である。ただ、これら文章は歐陽脩が翰林學士の任にあった時、職務として書いた文章である。著者は「歐陽脩自身の校閲を經て、歐陽脩自身の思想を示すものとして殘されている」と述べられているが、根據は示されていない。個人の思想がどれほど示されているかについては、愼重な檢討が必要だろう。

第四章「蘇洵の水官詩について―蘇洵と道教―」第五章「玉皇大帝と宋代道教―蘇軾を中心として―」第六章「蘇轍と道教―「服茯苓賦」・『靈寶度人經』・「抱一」・「三淸」を中心に―」第七章「『斜川集』を讀む―蘇過と道教―」第八章「蘇符と蘇籀―道教をめぐる兩蘇とその孫―」

第二部「宋代の文人と道教」の中心となる論考群。蘇軾兄弟を中心に父親の蘇洵、蘇軾の息子である蘇過、孫世代にあたる蘇符と蘇籀、蘇氏一族四代に亘って道教との關わりについて考察したもの。

第四章「蘇洵の水官詩について」では、蘇洵の張仙への「祈子」の事例、「老子」への肯定的言及、「風水」の文學論、「水官詩」の「水」の哲學などについて論究する。しかし、論文を見る限り蘇洵には道教を信仰すると言うほどの意識は見られないようである。第五章「玉皇大帝と宋代道教」は、玉皇大帝と宋代道教に關して太宗・眞宗の崇道政策を縱絲に、蘇軾の道教に關る詩文を橫絲にして、黃帝・老子の道、上淸太平宮と『翊聖保德傳』、眞宗の玉皇信仰と天慶觀の設置、更に玉皇大帝と蘇軾との關りについて論じている。一貫したテーマを論じたというよりは、いくつかの主題についての點描といえよう。第六章「蘇轍と道教」は、蘇轍の詩文を分析しその中から道教と關わり深い事實を指摘したもの。ここでは、服氣法の實踐、朱元經や蹇拱辰などの道士との交涉や道教經典の讀誦、老子への尊敬と青詞その他に見える三淸への信奉などが擧げられている。第七章「『斜川

集』を讀む」は、蘇軾の第三子、蘇過と道教の關わりを論じたもの。彼の詩文には、宋代以降最高神となる玉皇や天公の語が見える事や神仙を肯定する姿勢、『黄庭經』の名稱や内丹技法を思わせる記述の見える事等を指摘する。第八章「蘇符と蘇籀」は、蘇軾の孫の蘇符と蘇轍の孫の蘇籀を取り上げ、二人と道教との關わりを論じたもの。蘇符については新出土の「蘇符行狀」により、道教的語感をもつ「白鶴翁」と號したこと、また「養生の訣」を得て「導引」「辟穀」を實踐したことを述べる。蘇籀は、道教と儒教の雙方を尊重し、道佛雙修の立場を取っていたこと、その結果として三教兼修であった事を明らかにする。六章以下の諸論を通覽するに、それぞれの詩文には道教と關わりのある文辭が散見されるとはいえ、各人がどのような意識で道教に向かっていたか、道教を信じて（と言ってよいのか）いたか、については必ずしも明確ではないように思われる。また、道教や佛教を信仰するという點についても、現代人と同じ意識でいたのかどうかという檢討も含めて愼重な研究が必要であろう。このような問題に關しては、かつて宇佐美文理氏が論じた事がある（「蘇東坡の信仰」『三教交涉論叢』京都大學人文科學研究所　二〇〇五）。

以上幾つか筆者の目にとまった論考について簡單に述べてきた。本書は、一般士大夫と道教の關わりについて本格的に論じた最初の業績でありその意義は高く評價されよう。從來、ややもすれば道藏内で閉じている道教研究が、廣く中國學の視野のもとで行うべしとの問題意識の下で行われた研究として、その價値は計り知れないものがあろう。しかし、やや氣になる點もないわけではない。例えば、本書は唐宋の代表的文人達と道教の關係を全體的に論じる事が主眼であり、類書の存在しない初めての研究成果であるためにやむを得ないことではあるが、各々細部の論點については深く論じられていない。内容的に見ると論點の點描に止まっている場合の多いのは殘念なことである。また、論考の論旨が必ずしも明快ではない場合が見える。道教との關係の全體像を概觀すると

の視點のため、論點が多岐に亘り論旨を辿りにくくしている場合は當然存在する。しかし、それ以外にも、長文の引用を行いそれを根據として論理展開をするのだが、その肝心の論理展開の文章が短かすぎて十分に意を盡くせないため、論旨が曖昧に感じられる場合が見られるのは誠に殘念である。また、引用文が原文のままで句讀をきるだけの場合が多々あるのも、讀者に不親切であろう。

このような氣になる點も存在するものの、本書は唐宋文人と道教との關係について全體的に考察した初めての本格的な研究書であり、以後この分野の研究を行おうとする者にとっては、必讀の研究文獻となる事は間違いない。評者も今回大いに勉强させて頂いた。著者の學恩に感謝申し上げたい。

（A5判、五〇三頁、二〇一六年十一月、汲古書院、一三〇〇〇圓（稅別））